

## 挿絵の中の『風車小屋便り』

加藤 林太郎

### I. 向う向きのドーデ

ドーデの『タルタランの大冒険』は、挿絵のない版の方が、挿絵入りの版よりはるかに少ないと言って、そのリストを掲げている人がある。『風車小屋便り』についてもほぼ同じことが言えるのではないだろうか。いずれかの短篇がとり出されるなどして児童向け出版物になることが多いことを考えれば挿絵版の占める比率は前者よりも高いことが推測される。それだけに挿絵の性格も幅が広く、多くの挿絵版が紋切り型を形成もするが、その一方で挿絵家の工夫や気紛れもまた見られるのである。以下は、『風車小屋便り』の挿絵に見られるヴァリエーションとその考察である。

『まえがき』には、ドーデが村人から風車小屋をゆずり受ける契約書がそのまま用いられている。公証人の事務所には売買の当事者と証人が顔をそろえて、各自署名を行ったとされている。こういうわけで「物語のうちにはいない」ため、この『まえがき』には挿絵のないこともよくあるが、契約成立の場面が挿絵となることも多く、風車小屋を買いとるというユーモラスな行為の雰囲気伝えようとするのである。そしてこゝにパリから来た風来坊の詩人ドーデが「挿絵の人物」としても初登場する。全篇25篇のうちドーデは作中人物として15回現われるから登場率は実に5分の3にのぼる。

『風車小屋便り』はフォンヴィエイユ村の丘の風車ばかりが舞台でないことは勿論で、時には南フランスでさえない。それらの中には、後に『タルタランの大冒険』を生むアルジェリア旅行の紀行文や、またコルシカ島沿岸の灯台で暮した際の印象記も含まれている。つまり舞台は風車の丘を去ってパリへ、コ

ルシカ島へ、さらにはアルジェリアへと気まゝに移動する。従ってドーデの存在のみがかりうじて、プロヴァンスの丘を発信地とする『風車小屋便り』のアイデンティティを保たせるのであろう。そして「作中人物」ドーデをそれぞれの挿絵の中に見出すことができる。ただし、標準的な場面選択を行う「決定版全集」の挿絵では、これらの紀行文にドーデは登場しないし、むしろそれが普通である。

『居をかまえる』はフォンヴィエイヌ村の丘の風車に新住人のドーデが入居する場景を描くものである。この短篇集の諸篇はその多くが「半野天」の生活を描いている。作者ドーデ自身が登場する15篇の中の9篇においてドーデは野天にあり、『老夫婦』や『詩人ミストラル』といった訪問物語でさえ、ドーデは風車小屋から激しい風に吹かれつゝ野道をたどる。つまりドーデは登場人物であるとともに風景を見る眼でもある。こゝから挿絵の中に「向う向きのドーデ」が必要となって来るのであろう。

『居をかまえる』の挿絵の多くは、入居の夜ドーデが見たもの、つまり風車小屋の前の草原の中に集まり、月の光の下でたわむれるうさぎ達を描くことになるが、もしドーデがいれば、それらを発見するドーデになるのである。この向う向きのドーデは、表紙、口絵といった書物の玄関のような所でも見られる<sup>(1)</sup>。

『カマルグで』は、野鳥の宝庫ローヌ河口のカマルグ大湿原で、鳥猟にさそわれたドーデが銃猟を試みる。ドーデは射撃の名手タルタランではないから「戦果」よりも夕映えの水面の方に気をとられがちである。決定版全集では正統的に、銃を肩にしたドーデもつれた猟犬も正面からとらえられているが、芦の茂みの中で、夕焼空に見とれ、その空を渡って行く鳥影を見送る主人と犬を背後から描く挿絵も見られるのである<sup>(2)</sup>。

作者自身が数少ない登場人物の1人を演じるのは訪問物語『老夫婦』においてである。パリから来た一通の手紙は、この老夫婦の孫に当る旧友が、孫の訪問を待ちかねている祖父母の所へドーデを代理訪問させて無沙汰を解消しようという虫の良い希望を伝えているのであった。陽が照りつけ、ミストラルの吹き

まくる中をドーデは「代参」にとおもむく。そして孤児院で暮す単純な老人夫婦が孫の代理人ドーデに示す歓迎ぶりが語られる。この一篇の挿絵でドーデが描かれる場面はいくつかあるが、ドーデが友人の代役をつとめつつある情景をとり上げることにする。即ち左右から椅子を引き寄せ、かわいい孫のことを根掘り葉掘りたずねる老夫婦の間にはさまり、熱弁をふるうドーデである。その嘘まじりの「孫の噂」に満足を示す老人夫婦の表情が挿絵家の求めるところとならぬはずがない。ドーデがこちらを向こうが<sup>6)</sup>、あちらを向こうが<sup>6)</sup>、ドーデが二人の間にはさまる限り（作品に即した位置関係）、じいさんとばあさんは横顔しか見えない。ある挿絵家は彼等夫婦をテーブルの向うに並べた<sup>6)</sup>。じいさんは大喜びで質問をあげせ、ばあさんは笑顔でうなずく。そしてドーデはといえば姿がないのである。うしろ姿もない。テーブルの上に置いた帽子ひとつ、それがドーデである。『風車小屋便り』全篇にわたって、しばしば物語の立会人となるドーデの間接的なプレゼンスを最も好ましく表現した挿絵と言えよう。

『風車小屋便り』のもうひとつの訪問物語は『詩人ミストラル』である。マイヤースにミストラルをたずねたドーデは昼食をともにし、聖エロワのお祭りを見物。夕食後はミストラルの新作『カランダル』の朗読に聴き入るのである。ミストラルとドーデの出会いといえば誰もが思い出す写真がある。マイヤースの草上に椅子を持ち出して掛けたミストラルとドーデ、その写真にある通り、帽子のまゝのミストラルとドーデを挿絵は遠慮なく「複写」する。決定版全集の挿絵ではミストラルのかたわらでドーデはたばこの煙で入道雲を作っているが、これも写真の中のドーデにたばこを吹かさせたものに他ならないし、ガンドンの挿絵は<sup>6)</sup>、その同じドーデを立ち上らせたものである。このような写真の「複写」は、突然肖像画を描く必要を生じた挿絵家の苦肉の策であるよりは、むしろ一種のパロディであろう。

## II. ドーデ記念館

その「パロディ」は人物の肖像にとどまらない。『風車小屋便り』の実際の主人公たる風車小屋にもそれは見られる。ロワールの挿絵による版の表紙には<sup>9)</sup>、しばしば絵葉書になっているように、左を向いた風車と糸杉が描かれているが、よく見れば小屋の入口に「博物館」と書いてある。「ドーデの風車」即ち現在のドーデ記念館そのものなのである。画家は巻末にもスケッチ集を入れ、「ドーデの風車」の内と外を紹介している。画家はフォンヴィエイユのドーデの風車まで足を運び、実地にスケッチしたのである。屋根の頂の風見になっているカマルグの牡牛までスケッチされている。これは写真の複写どころではない。現存する実物の風車小屋、即ちドーデ記念館を挿絵にしたのである。フィクションを置き去りにした面白さがそこには感じられる。

作品中「実物」が登場可能なもうひとつの場合は『まえがき』であろう。なぜならそれは売買契約書そのものだからである。ベルヴェスによる挿絵版の第1頁は従って古い契約書である<sup>10)</sup>。古証文の中央には折れ目が入り、その上端は少し破れかけている。ペンにインクをつけて書き始めるとほどなく字がかすれて来る。誰かが落してつけたインクのしみもひとつある。文末には公証人はじめ全員の署名があり、実物に似せたアルフォンス・ドーデの署名も中ほどに混っている。これは『風車小屋便り』の全挿絵版の中での異色の一頁であろう。『まえがき』の全文ではあるが、手書きの一頁であるからには、これも挿絵のひとつに算えられよう。

『風車小屋便り』は半野天の情景が大半を占めるから、当然野生の動物や植物が主人公のまわりに現れる。その生き物たちで以て図鑑の一頁を作り上げた挿絵がある。『野原の郡長』の郡長は、農事共進会の会場へ向って日ざかりの野原の中を馬車で揺られているのであるが、演説の文句が浮んで来ないので困っている。そこで馬車を待たせて林へ入り、緑陰で案をねることとする。ところが部下たちが待ちくたびれて来てみると、郡長は鳥や花や小川のせせらぎに

誘惑されてしまい、すみれの花を口にくわえて詩を書いていた。鳥や草花たちがいっしょになって郡長をからかい、仕事をやめさせてしまうのだから、ある挿絵では<sup>90</sup>、郡長原稿を小鳥がモズの早にえのように枝に刺している。ユリエの挿絵では<sup>91</sup>、枝の間から苦心しているはげ頭の郡長が見えてはいるが、近景の木の茂みには、図鑑の「生態図」のように木の葉、小鳥たち、はさみ虫やてんとう虫といった昆虫類が描かれている。小鳥は「ムシクイ」と、「ウソ」、樹木は「セイヨウヒイラギガシ」にほかならない。陰影はなく、各生物いずれも特徴を最大限に示す側面を見せて静止している。大版の児童向け出版物であるから、サーヴィスとして子供に親しい着色図版を再現したのであろう。

『金の脳みそを持った男のお話』は幻想短篇であるから、その男の不思議な肉体的特徴を挿絵も何とかして示そうと努める。金の脳みそを持って生まれた男は、頭の金を親にいくらかせびり取られ、友人には就寝中に盗まれ、また青春の放蕩のために大量に消費する。そして愛する女性の気まぐれに奉仕して、その女性が死んだ時には頭蓋は空になっていた。多くの挿絵は男が頭頂をふたのように開いて黄金をとり出す場面を描くが<sup>92</sup>、中に、大小様々の金貨を並べるといふ思い切った挿絵がある<sup>93</sup>。この物語の「黄金」は、浪費される才能と青春であろうから必ずしも金銭ではない。だとするとこの即物的な挿絵は比喩を今一度比喩にとりかえて絵にしたものかも知れない。金貨の一つには血がこびりついているから、この男が頭から血を流しつつ取り出したものにちがいない。つまり黄金を金貨で表現したのである。やゝ絵解きのこの作品をさらに絵解きしたものと言える。

『法王のらば』では、アヴィニョンの人のよい法王が驃馬を溺愛しているのを利用してとり入った悪青年が、いい気になって驃馬にひどいいたずらをする。それを驃馬がおぼえていて、七年の後に物の見事に復讐を果す。ところでその挿絵の中に、からしに用いる「つげのさじ」がしばしば現れるのである。その「さじ」は悪青年が法王にとり入って任命された職務の名称およびその地位を表わすしなのである。そもそもこの短篇は成句にもとずいて作られたものであるが、一つの成句ではないのではないか。表題の「法王のらば」は別義に

において「十字架が刺しゅうされた教皇の白いスリッパ」でもある。さらに件のつげのさじをしるしとする官職はアヴィニョンの法王ジャン12世が甥のために新設した職務 le premier moutardier (からしの頭<sup>かみ</sup>)であって、悪青年テスト・ヴェデーヌはこの職に任命されるのである。この職名からさらに成句 se croire le premier moutardier du pape (法王のからしの頭の気でいる)「うぬぼれが強い」が生じた。このような成句を原義のレベルに戻して作られたのがこの一篇ではないだろうか。だとすればソーヴェージュの挿絵の中の芥子の大壺を抱え<sup>69</sup>、大さじを持つ羽根つき帽のテスト・ヴェデーヌは、この物語のどれかの場面をあらわしたものではもはやない。職務の名「芥子の頭」の誇張であるか、成句「うぬぼれが強い」の絵解きであろう。

そして『スガンさんの牝山羊』の結びのプロヴァンス語「朝になると狼は山羊っこを食っちゃっただよ」を絵解きする挿絵も見られるのである。スガンさんの飼う牝山羊はみんな山へ逃れ出て狼に食われてしまう。今度の牝山羊ブランケットもまた自由を求めて小屋を飛び出し、山で狼に食われてしまう。多くの挿絵はスガンさんの牝山羊の前へ夕闇の中からぬっと現れた黒い狼である。牝山羊を食おうとする狼も稀にはある。しかしブランケットが何物も残さず狼の腹におさまってしまった図はさすがにユリエの挿絵一例しかない<sup>69</sup>。草花の生える山頂で舌なめずりする狼の足もとには、二本の角と四つのひずめとかつてブランケットをつないでいた首輪、つまり食べられないものだけが残っている。遠くの丘の上にはドーデの風車が見えている。「食っちゃっただよ」はペローの『赤ずきん』(ドーデに『赤ずきん物語』がある)のラストシーンになったと思われるが、おばあさんの後を追って狼の腹の中におさまってしまった赤ずきんが恐らくこの極端な挿絵の遠い発生源であろう。

### Ⅲ. 風車の羽根に喪章

『風車小屋便り』には聖職者を中心的登場人物とする話が四篇ある。そしてそのうちの三篇の挿絵に悪魔が姿を現わす。挿絵の中の悪魔たちは『キュキュ

ニャンの司祭』では、司祭が訪れる地獄の「刑吏」として登場し、『三つの読誦ミサ』では、見習僧ガリグーに化けて司祭を墮落へと誘ったのであるが、これらは直接的または間接的に作品の記述を表現したものである。しかし『ゴージェ神父の養命酒』では挿絵にのみ悪魔は登場するのである。なぜならそれは誘惑に負けてしまう神父の物語であるからだ。ドーデの作品において誘惑に負けてしまう人物は多いが、その犠牲者が神父であるから悪魔は挿絵に現れるのである。

さてゴージェ神父は窮乏におちいった修道院を立て直すため、かつて薬草通の不思議なばあさんが試みていた秘伝の養命酒を作り出すが、これを修道院が売り出して大成功となる。この発明家は修道院にとってなくてはならぬ存在となり、旧礼拝堂を研究室にして閉じこもり、養命酒生産に専心する。ところが毎日の味見が度を過ぎて中毒症状を引き起こすに至る。神父はある日、夕べの礼拝の真最中に突然下品な歌を高唱し始める。それでも神父は処罰を受けるところか礼拝まで免除され、実験室で心おきなく飲みかつ歌ってよいことになる。このゴージェ神父の奇怪なる実験室は大部分の挿絵がとり上げている。そしてそこへ時々悪魔が出現するのである。ロワールの挿絵では<sup>94</sup>、薬液壺の上にも、巨大な蒸留器の上にも、三叉槍を握り、薄笑いを浮べた尾の長い悪魔たちが腰をおろし、修道院の繁栄のためにゴージェ神父が墮落して行くのを楽しみにして見守っている。作品の中にはこの様な挿絵に直接該当する個所はない。つまり作品にはないものを描いて内容をあらわしたのである。これも一種の象徴的な表現であろうか。

キュキュニャンの司祭が村民のこれまでの昇天数をたずねるため天国に聖ペテロを訪れたとしても、作者は宇宙旅行を描く気はなかった。「先だつての夜、この罪深い私が天国の門の前に立っていたのです。戸をたたくと…」で司祭の天界遍歴談は始まる。ところがソーヴァージュの挿絵では<sup>95</sup>、大きな鍵を腰に下げ、机にひろげた名簿をめくる聖ペテロと訪問者たる司祭を乗せた雲のまわりは騒然と天体が乱舞する。半月（顔がある）、輪を傾けた土星、軌道に乗った衛星を伴う木星、遠く近くほうき星四ヶ、そのうちの一つは今や聖ペテロの足

元をかすめて行く。そして満天の星々。星空を描いたもう一人の画家デュマの挿絵のただの星五つとは大変な違いである<sup>99</sup>。この天文学的挿絵はドーデの作品というよりヴェルヌのロケット物語の挿絵にこそよりふさわしそうである。

ドーデの挿絵家にはユーモリスト系の画家（例えば『タルタラン』のデュブー）が多いこともあって、このような誇張の傾向が少なからず見られる。従って作者自身が比喩的表現を要所に据えた時には、これを見逃すはずがない。『コルニュー親方の秘密』は、近代的製粉工場に追われて村の丘から消えて行く風車の名誉を守ろうと、ドン・キホーテ的な抵抗を試みる粉ひき老人コルニューの物語である。挿絵の多くは、村の古老が語る「風車はなやかなりし時代の丘のにぎわいを描く。クルーズーの挿絵もそうである<sup>100</sup>。遠近三基の風車はぶんぶんまわり、村の男女は手に手をとってファランドールを踊る。ところがその空には雲のようなものが勢よく流れ、翼を生やした天使らしい童がその雲を吹き送っているのが見られる。これはコルニュー親方が村人を集めて行った「反製粉工場」の演説を絵にしたものなのである。親方は言う「あの悪党めら、パンを作るのに蒸気なんぞを使いやがる。蒸気ってのは悪魔が発明したもんだぞ。おらのほうはミストラルとトラモンターヌで仕事するんだ、こっちは神さまの息吹なんだからな…」。その「神様の息吹」を描き込んだものである。

決定版全集の挿絵は普通この様な遊びとは縁がない。ところが『金の脳みそを持った男のお話』（前出）の冒頭の挿絵は例外であろう。ドーデの風車の翼に黒い喪章が結びつけられている。この一篇は「愉快的話を求められる夫人に」という副題を持っている。つまり一種の詫び状から始まるわけである。「暗い思いに沈むには不向きな」南フランスの陽光の丘から悲しい話を届けて申しわけないが、実はパリからの暗い知らせは毎日のように送られて来て、今日もある訃報を知って「私の風車小屋はそのため深く喪に服している<sup>101</sup>」と言うのである。これを文字通り絵にしたのが上記のヴィルブッフの挿絵である。それにしてもこれらの挿絵はいかに超現実的でも確かに作品の中の一文に発生源を持っている。しかし『星』のロワールの挿絵は挿絵自体が物語の比喩的表現だと言ってよい。



『星』は次に配列されている『アルルの女』とともに、身分ちがいの愛の苦しみを描いていると見ることができる。『アルルの女』の恋する青年ジャンが自殺に頼ってその苦しみを断ち切ったのとは違い、『星』の語り手「プロヴァンスのある羊飼い」は禁断の愛の喜びを味わうのである。戯曲化された『アルルの女』でこの羊飼いはバルタザール老人となって若き日の禁じられた恋を回想する。ロワールの思い切った挿絵はここから生れたのに違いない<sup>9)</sup>。山上のひとり暮らしの羊飼いに二週間分の食べ物を届けにやって来た主人の娘「ステファネットさん」は、谷川の増水のため下山できず、一夜を星の降る山の上で過ごすことになる。おう揚なお嬢さんは、羊飼いの語る星の話を聞きながら、彼の肩に頭をのせて安らかな眠りに落ちる。

ロワールの挿絵を見れば、青い星空の下で夜も紫色の草花は咲き、暗い樹木の枝には小鳥やりすが眠っている。そして片膝をついた羊飼いは、ステファネットさんの裳裾の端をうやうやしく手にとり、これに口づけをしているのである。山上の放牧場に一瞬騎士道恋愛物語が発生する。この挿絵を目にして、やはり一瞬作品を忘れてしまわない読者はあるまいと思われる。

#### IV. 「いなご」と「きりぎりす」

『星』の挿絵の中で、このように羊飼いの代りに騎士が貴婦人の前にひざまずいていても、これはあくまで表現であって誤りとは言えない。しかし時に挿絵家は誤る。そしてその誤りの原因はやはりよく見れば作品の中にあると言える。

『ビクシウの紙入れ』はある日バリのドーデ宅をたずねて来た老諷刺画家との出会いを語っている。かつては大臣たちからさえ恐れられたビクシウは今も眼疾のため落ちぶれて、病気がちの娘を修道院に入れてしまった。そして自分は煙草店の営業許可を得るため、役所通いに心身をすりへらしている。別れぎわに落して行った紙入れからこぼれ出た品々が、彼の悲劇をもう一度語り直す。ところでサント・クロワの挿絵では<sup>10)</sup>、戸口に現れたビクシウを描いてい

るが、その背後に糸杉が見えているのである。「十月のある朝、パリを離れる数日前、私のところへひとりの老人がやって来た」の場面に違いない。南フランスを舞台にした短篇集であるから挿絵家は間違っただけであろう。『風車小屋便り』は必ずしもフォンヴィエイユの丘を定位置としない。この『ピクシウの紙入れ』と『オレンジ』の一部分はパリに舞台が移る。そのような場所の移動に注意しなければ、ゴッホ描くところの糸杉がパリのドーデ宅の前に立つことも起るのであろう。

挿絵家が作品の記述に注意を払うと払わないとで挿絵に奇妙なヴァリエーションが生まれる。挿絵と作品の間の不安定な関係とも言える。『二軒の宿屋』はドーデの目撃談である。街道筋の宿屋の病身のおかみさんが、向いにできた新しい宿屋の魅力あふれるおかみのために、客ばかりでなく主人までも持ち去られてしまう。ドーデはこの雨戸がやぶれて空屋のような古ぼけた宿屋へ休息のために入って行く。「中にはいるとがらんとして陰気なほそ長い広間で、カーテンのない三つの大きな窓からさしこんで来るまばゆい日の光が…」。さて、各挿絵のこの記述への「忠実度」は大いに疑問である。つまり「窓にカーテンがある」のだ。窓に立って向いの宿を眺めているみじめな女を描くのには気をとられて、カーテンのない「特別な窓」を忘れたとしか思えない。作品の記述と挿絵は幾何学的な相似関係を必ずしも常に保ちはしないであろう。この挿絵に見られる「ずれ」もそのようなものに過ぎないのであろうか。むしろ、「カーテンのない窓」を正しく描いている挿絵の方の忠実性にこそ敬意を表わすべきなのかも知れない。

短篇集のしんがりを受け持つ『兵営への郷愁』は挿絵の一定しない見本のようのものである。パリから村へ休暇で帰っている第三十一歩兵連隊の鼓手グウゲ・フランソワは、村で退屈して兵営への郷愁を感じている。そこで役場の太鼓を借り出し、松林へ来ては太鼓を打って、パリの兵営生活を夢見るのである。そして作者自身もそろそろパリへ帰りたくなって来る。さてこの休暇中の太鼓手はどんな服装をしているのか。多くの挿絵が「軍服」と答えるのである。青い服に赤い軍帽と赤いズボン。第Ⅱ帝政期の仏軍の出で立ちである。要するに

松林の中の迷い子の兵士なのである。しかし恐らくは軍服まで着こんではいるまい。その点は決定版全集の挿絵が正しいのではないか。しかし、これも挿絵家の用いた表現であるかも知れない。軍服の鼓手は、帰郷中の兵士グウゲ・フランソワの心の姿にほかならないとも言えるからである。しかし作者の側に用語のあいまいさがあったならば挿絵はどうなるのであろうか。『蝗』の挿絵には次のようなことが起る。

『蝗』では、ドーデが訪問中のアルジェリアの農場で、突然襲って来たイナゴの大群によって農園が大被害をこうむる。ところで挿絵もまたその飛蝗の大群を描く。「その雲は平野の上に巨大な影を落しながら絶えず前進する」という絵画的な描写を挿絵家がとり入れないはずがない。そしてその「雲」を描く分には問題がないのである。いなごを一匹とり出して挿絵にした時ヴァリエーションが生じる。ある時はひげが短く、ある時は長い。前者ならば「ばった」「いなご」であろう。後者ならば「きりぎりす」と思われる。黒雲となって出現し、植物を食い尽す虫群は、たたりによってピラミッドから発生するという迷信もある位に恐れられて来たが、これは「ばった」の類であって、「エジプトチイナゴ」「サバクトビバッタ」と呼ばれるものである。ところでこれに対し二つの言葉が当てられる。cricket と sauterelle である。こゝに混同の原因はあるのではないか。現にドーデの『蝗』も表題は Sauterelles であるが、地平線にイナゴの大群を発見した農夫は《Les crickets! les crickets!》と叫んでいる。文中 cricket は二回、sauterelle は四回用いられ、女性形代名詞はすべて後者だとすると sauterelle はさらにふえる。中には crickets の次に elles と書いた個所もある。作者自らが大した区別を設けてはいないのだと言える。辞典の記事によれば混用は一般化しているとのことである。そこで挿絵においても、昆虫の分類はあまり気にせず、ある時は「きりぎりす」ある時は「ばった」が描かれるのであろう。ところでアンドレ・ジルの戯画のひとつに「ばった」にまたがって空を飛ぶドーデがある。もちろん『蝗』の作者を描いたものであろうが、その巨大な昆虫はひげや羽根などから正しく「ばった」と判断できる<sup>89</sup>。

## V. カマルグの岸に立つドーデの風車小屋

「混同」と「混合」は同じではない。挿絵家はまた作品の中の現実と想念、時には作品の数場面を混合して一枚の挿絵に描き込むことができる。『兵營への郷愁』（前出）において帰省兵士が太鼓を打つ松林の上空にノートル・ダム寺院が浮ぶクルーズの挿絵があるし<sup>89</sup>、デュプレの挿絵では松林の空にパンテオンが浮かぶだけであって兵士さえいないではないか<sup>90</sup>。さらにパレイエの挿絵では極端に簡略化されて太鼓と街灯だけである<sup>91</sup>。これらはそれぞれ現実と想念を混合して描いたものと言えよう。ロワールによる『アルルの女』の挿絵では<sup>92</sup>、自殺した息子をひざに横たえて嘆き悲しむ母親という一見ピエタを思わせる場面であるが、その背後にはアルルの女と青年が手をとって踊る姿がグレーで浮び上っている。挿絵によってはアルルの闘技場でジャンがアルルの女と語り合う場面などを描くものもあるが、本来は作品中にアルルの女は登場しない。農場を訪ねて来るのはその情夫である。このことは劇化された作品でも変わらない。であるから間接的にグレーのシルエットとして現れるのが本当であろう。

『散文のパラード』の冒頭、初霜の降りた風車の丘の上の空をこうのとりたちが大きな三角形を描いてカマルグ湿源の方へと降りて行くのを作者は眺める。ところでデュ・メーニルの挿絵では<sup>93</sup>、芦の間に小舟などが浮ぶカマルグ湿原の向うに小さく風車小屋が見え、その上の空にこうのとり群が三角形になって飛んでいる。一見問題のない風景であるが、実はローヌ河を渡ってはるかカマルグの岸辺まで風車小屋を移しているのである。このような「距離の圧縮」は一例だけではない。これに対して「時間の圧縮」と言える挿絵が『スガンさんの牝山羊』には見られる。

スガンさんが飼っている牝山羊は今度もまた自由を求めるあまり、優しいスガンさんを見捨てて山の中へ逃れてしまう。そして夜になって現れた狼を相手に東の空が白むまで勇敢に闘ったあげく食われてしまう。多くの挿絵は、山の

自由を満喫しつつある牝山羊ブランケットが、草花をくわえて崖の端へ現れ、小さく見えるスガンさんの家と庭を見おろして「どうしてあんな中にいられたのかしら？」と涙が出るほど笑ってしまう、という場面を採用する。そして夕方になって心配したスガンさんが山へ向ってラッパを吹く。その頃には遠くに狼の吠え声も聞こえ始め、そして、やがて森の闇から目を光らせた狼が出現するのである。

ジャンジャンの挿絵では<sup>(8)</sup>、崖端から山羊が見おろし、下ではスガンさんが早くもラッパを吹く。ショピーの挿絵では崖端で下を眺めるブランケットの背後にもう狼が顔をのぞかせている<sup>(9)</sup>。さらにロワールの挿絵では<sup>(10)</sup>、草花の間を流れる谷川を野山羊といっしょに飛びこえて、牝山羊が幸福に酔いしれている一方で、早くもスガンさんはラッパを吹き始め、向うの木のかげからは狼が片目をのぞかせている。つまり物語のあらすじを一場面にまとめたものである。さすがにスガンさんは向う向きだし、狼は片眼だけであるのが「時間の圧縮」に遠慮するかのようで微笑ましい。

しかし「圧縮」の最も微笑ましい例はマルティによる表紙絵に見られる<sup>(11)</sup>。草山に腰をおろしたドーデが羽根ペンを手に『風車小屋便り』を執筆している。それを背後から『コルニーユ親方の秘密』の恋人たち（親方の孫娘と語り手の息子）二人が、つま先立ちになってのぞき込んでいるのである。これは「場所」や「時間」を圧縮したのとは違う。作者と作品の境界を取り払ったものであるから、「二つの次元の混合」とでも呼べばよいのであろうか。

#### 注

- (1) “Leurs chefs-d’œuvre” Ed. Terres latines, ill. André Collot. 1965.
- (2) Collection “Pastels” Ed. du Panthéon, ill. C. Chopy. 1953.
- (3) Ed. d’art H. Piazza, ill. Marcel Jeanjean, 1954.
- (4) Ed. La bonne Compagnie, ill. Jean Denis Malclès, 1945.
- (5) Nelson, Editeurs, ill. Georges Pierre Dutriac, 1935.
- (6) Librairies des amateurs, ill. Pierre Gandon, 1937.
- (7) Ed. Jacques-Petit, ill. Gabriel Loire, 1946.
- (8) Flammarion, ill. Pierre Belvès, 1954.

- (9) Ed. Terres Latines, ill. Marianne Clouzot, 1949.  
(10) Maison Mame, ill. Albert Uriet, 1935.  
(11) cf. (3)  
(12) cf. (8)  
(13) Ed. de la bonne Etoile, ill. Sylvain Sauvage, 1935.  
(14) cf. (10)  
(15) cf. (7)  
(16) cf. (13)  
(17) Ed. du verseau, ill. P. L. Dumas, 1946.  
(18) cf. (9)  
(19) A Daudet, Œuvres I, Bibliothèque de la Pléiade Gallimard 1986, p. 325.  
(20) cf. (7)  
(21) Ed. Fasquelle, ill. G. de Sainte-Croix, 1957.  
(22) A. Daudet, Œuvres complètes illustrées, Edition Ne varietur. III. 1930. p. 202.  
(23) cf. (9)  
(24) L'artiste, ill. Valentine Dupré, 1944.  
(25) Le club du meilleur livre, ill. Palayer, 1956.  
(26) cf. (7)  
(27) Maison Mame, ill. Amaury du Mesnil, 1958.  
(28) cf. (3)  
(29) cf. (2)  
(30) cf. (7)  
(31) Ed. d'art. H. Piazza, ill. André-Edouard Marty, 1938.